シングリズム ―シングルに対する否定的ステレオタイプ―

山本 雄大　（八戸学院大学）

山本 潤美

Singlism: Negative stereotype against single people

Takehiro YAMAMOTO（Hachinohe Gakuin University）

Hiromi YAMAMOTO

Abstract

The purpose of present study is to examine negative stereotype against single people who have neither spouse nor partner. In study1, we replicated the research which Greitemeyer (2009) conducted. Results showed that participants evaluated single targets more negatively than the targets having intimate partner in terms of personality, quality of life and physical attractiveness. In study2, we attempted to explore psychological mechanism that produce singlism. We hypothesized that a priori belief relevant to marriage-oriented lead people to evaluate negatively against singles. As a result, we found that people who have strong marriage-oriented belief evaluate negatively against single targets.

要約

本研究の目的は，日本社会において配偶者も恋人もいないシングルへの否定的ステレオタイプを検討することである。研究 1 では Greitemeyer（2009）の追試を行い，シングルのターゲットが、パートナーのいるターゲットよりも，パーソナリティ，生活満足感，身体的魅力を否定的に評価されることを明らかにした。さらに，研究 2 ではシングリズムを生み出す心理過程について検討した。本研究では，結婚願望信念がシングルに対する否定的評価を導くと仮説を立てた。その結果，結婚願望信念を強く抱く人ほどシングルの外向性を否定的に評価した。

Key words: marital status, romantic relationship, stereotype, prejudice

シングリズムとは

結婚や恋愛は個人の自由であり義務ではない。配偶者や特定の恋人を有さない人々はそうした生活において自由を謳歌しているようにも見える一方で，パートナーがいないというだけで否定的な扱いを受けることもある（DePaulo & Morris, 2006）。このようなシングルライフを送る人々に対する差別，偏見，ステレオタイプはシングリズム（Singlism）と呼ばれ，近年の社会心理学においても興味深い研究テーマとなっている。

シングルの定義は各研究者によって微妙な違いがある。恋愛関係にあるパートナーの有無によってシングルか否かを分けようとする研究者もいれば，法的な結婚の有無によってシングルか否かを分ける研究者もいる。Greitemeyer（2009）は前者の定義を採用し，未婚でかつ恋人もいない人物を「シングル」と定義した。その上で人々がシングルに対して抱くステレオタイプについて研究を行った。この研究では異性関係（シングル，非シングル）を操作した架空人物のプロフィールを呈示し，参加者に外向性，協調性，勤勉性，情緒不安定性，開放性，身体的魅力等の観点から評定させた。その結果，シングルと記述された人物は非シングルの人物と比較して，外向性，協調性，勤勉性，開放性が低く，情緒安定性に欠け，身体的魅力にも劣るなど否定的に評価された。外向性，協調性，勤勉性，開放性，情緒安定性はビッグファイブと呼ばれるパーソナリティの主要構成要素であることから，この知見は恋人も配偶者もいないというだけでシングルの人々がパーソナリティ全般に問題があるとみなされることを意味するものであった。未婚の独身者をシングルと定義した Morris, DePaulo, Hertel and Taylor（2008）は，シングルが既婚者より未熟，自己中心的，社会的に不適応だと評定されることを明らかにした。また，シングルの年齢があがるほど否定的評価が強まることも明らかにした。

シングリズムはシングルの人々に対する処遇にも影響を与えている。米国中年期発達研究（Midlife Development in the United : MIDUS）の調査データを再分析したByrne and Carr（2005）は，既婚者と比較して未婚者が「レストランで質の低いサービスを受けた」や「人から無礼に扱われた」などの差別的経験をより多く報告することを明らかにした。欧米でのシングリズムに関する知見の蓄積と比較して，日本ではシングリズムを扱った研究がほとんど見られない。そこで本研究では，欧米で行われた研究を参考に，日本人の間でもシングリズムが見られるかどうかを検証すると共に，それを生み出すメカニズムについても検討を行う。

日本社会におけるシングルの現状

近年の晩婚化の進行とともに，日本社会における独身者の数は増加傾向にある。50 歳までに一度も結婚しなかった人の割合を示す生涯未婚率は，1990 年時点で男性 5.57%，女性 4.33％と少なかったが，2015 年には男性 23.4%，女性 14.1%と顕著に増加した（総務省統計局, 2016）。また，社会情勢の変化に伴って，「必ずしも結婚する必要はない」という意見を支持する人も増加傾向にあり，2008 年にはその割合が 60%にも達した（NHK 放送文化研究所, 2009）。これらの社会調査のデータは，多くの日本人が結婚を個人の自由とみなし，生涯独身という生き方をライフ・スタイルの一つとして許容していることを示唆するものであろう。その一方で，独身者を否定的に見る風潮も日本社会には根強く残っている（山田・白河, 2008）。独身者を指す俗語はいくつかあるが，それらを思い浮かべてみれば明らかなように「売れ残り」「お局様」「行き遅れ」などと否定的な意味合いを含んでいるものも多い。独身者を揶揄する俗語の存在が示唆するように，表面的には結婚を個人の

自由と認めながらも実際には結婚していない独身者に対して否定的な評価を保持している日本人もいまだ多い可能性がある。また，インターネットのコミュニティの中では，恋人を有する人々を「現実社会での生活が充実しているという意味」で「リア充」と呼ぶ。こうした俗語表現もまた恋人がいることを良しとする風潮が日本社会の中で根強く支持されていることを示唆するものであろう。こうしら日本社会の現状を踏まえて，本研究の第一の目的はシングルを否定的に評価するステレオタイプが日本人の間にも存在するのかどうかを明らかにすることである。具体的には，ドイツ人を対象に行われた Greitemeyer（2009）の研究の追試を行い，日本人が配偶者も恋人もいないシングルに抱く否定的なステレオタイプについて，パーソナリティ特性，身体的魅力，生活満足感，異性関係の満足感，孤独感などの観点から検討を行う。

シングリズムはステレオタイプか

シングリズムがシングルに対するステレオタイプではなく，シングルという集団の何かしらの実態を反映している可能性も否定できない。この点を確認するために，Greitemeyer（2009）は参加者自身に自己評定を行わせた。その結果，パーソナリティ特性，生活満足感，身体的魅力に関する自己評定おいてはシングルの参加者と非シングルの参加者の間で有意な差は見られなかった。その一方，現在の異性関係への満足感や孤独感に関する項目においてはシングルの参加者と非シングルの参加者との間で自己評定に差が見られた。シングルは非シングルよりも自分自身の異性関係に対する満足感を低く，そして，自分自身を孤独であると評定していた（Greitemeyer, 2009）。このことから現実にはシングルのパーソナリティ特性，生活満足感，身体的魅力においては非シングルよりも劣っているわけではないことが明らかとなった。これらの次元における否定的評価はシングルの実態というよりは彼らに対するステレオタイプである可能性が高い。

シングリズムの形成

シングリズムが存在することはこれまでの欧米の研究によって明らかにされてきた一方，なぜシングルに否定的な評価が結び付けられやすいのかというシングリズムの生成に関する心理過程の検討は進んでいない。ステレオタイプ生成過程を明らかにする手がかりとなるのが，シングリズムが外集団差別に基づくものであるのかどうかということである。異民族に対する偏見や差別がそうであるように，その多くは自らの集団の優位性を知らしめるために外集団の価値を貶めようとする自己高揚動機づけによって引き起こされる外集団差別である。もしシングルに対する否定的評価が恋人あるいは配偶者を有する参加者のみに見られるのであれば，シングリズムも外集団差別であり，その背景には恋人や配偶者を有する者たちの自己高揚動機があるということになるであろう。しかしながら，こうしたシングリズムの生成過程について唯一検討した Morris, Sinclair and DePaulo（2007）はシングルに対する否定的評価が評定者の異性関係とは無関係に生じることを見出している。具体的にはシングルの評定者もまたシングルという集団を否定的に評価する傾向にあった。この知見に従う限り，シングリズムは自己高揚動機に基づく外集団差別ではないということになる。しかし，Morris et al（2007）以外にシングリズムと外集団差別の関係性について言及している研究はなく，彼女たちの知見が妥当なものと言えるかどうかは確かではない。そこで，研究 1 においてシングリズムが自己高揚動機に基づく外集団差別であるか否かについて日本人を対象に検討を行う。

研究 2 では，外集団差別に代わるシングリズムの生成過程を行う。シングリズムが評価

者の個人属性の影響を受けないのであれば，シングリズムを生み出す原因は自己高揚動機といった個人的な関心というよりは社会的に共有された信念に基づくものである可能性が高い。そこで，研究 2 ではシングリズムを生み出す社会的信念の存在を仮定し，その効果を検討する。本研究で注目するのは「成人は皆，結婚や恋愛をしたがっている」という考え方である。Moris ら（2008）はこうした信念が欧米社会の中で広く共有されていることを指摘している。日本においても，若尾・勝谷・天野（2003）が恋愛普及幻想と名前をつけてこうした信念が広く浸透していることを明らかにしている。そして，これらの信念の下では，シングルの人々は結婚や恋愛を望んではいるものの，そうした望みを達成できていない失敗者として知覚されることになる。そして，その失敗はシングル自身のパーソナリティの問題や身体的魅力の乏しさに帰属されることになるであろう。研究 2 では，恋愛願望信念に基づくそうした原因帰属がシングルに対する否定的なステレオタイプを生み出す要因となるのか検討を試みる。

研究 1

シングルには自らの意思で結婚や恋愛関係を拒絶する人と結婚や恋愛関係を望みながらもそれを得られていない人が含まれている。では，人々はシングルの典型としてそのどちらを思い浮かべるのであろうか。Greitemeyer（2009）は参加者がシングルとされた人物の異性関係の満足感を低く評定したことを明らかにしており，このことから人々は結婚や恋愛を望みながらもそれを達成できていない人物をシングルとして想定していると推察される。では，人々はシングルが結婚できないあるいは恋人を得られない理由をどこに帰属するのであろうか。私たち人間は結果の原因を環境ではなく行為者の内的特性に帰属しやすくなる対応バイアスを有していることから，シングルである理由は彼らの内的な問題，とりわけ，パーソナリティの全般的な問題へと帰属されると予測される。それゆえ，日本人を対象とした場合にも，Greitemeyer（2009）の知見と同様に，シングルは非シングルの人物と比較してより内向的で, 協調性が低く，勤勉性に欠け，情緒不安定だと評価するであろうという仮説を立てた（仮説 1）。

離婚や DV の多発，その背後にある夫婦間葛藤を考慮に入れると，結婚やカップリングが幸福感や生活満足度の向上に直結するかは疑わしい。しかしながら，人々が結婚や恋愛を不幸感や生活への不満満足を導くと考えているのであれば，誰も結婚も恋愛もしたがらないはずである。社会の過半数の人々に恋人なり配偶者がいるという現状を鑑みれば（筒井, 2010），恋愛や結婚が幸福感や生活満足感を高めると信じている人が多いと言うことであろう。そうした信念が共有されている可能性がある以上，人々は非シングルと比較してシングルの生活満足感を低く評価するであろう（仮説 2）。Dion et al（1972）が示唆するとおり，人々は身体的魅力が高い人物ほどその人柄も良く，恋愛や結婚においてよりパートナーを見つけやすくなると信じている。このため，人々は恋人も配偶者もいない原因をシングル自身の身体的魅力にも帰属することであろう。そこで，本研究では彼らの身体的魅力は非シングルの人々より低く評定されるであろうと仮説を立てた（仮説 3）。

本研究ではシングリズムがステレオタイプであることを確認するために，シングルの参加者とパートナーがいる参加者にパー

ソナリティ特性, 身体的魅力, 生活満足感, 異性関係満足感，孤独感について自己評定を求め，有意な違いがみられるかどうか探索的に検討を試みる。また，シングリズムが恋人あるいは配偶者などのパートナーがいる者の自己高揚動機に基づいた外集団差別であるかどうかを検討するために，参加者の異性関係によってシングルとされる人物に対する評価に違いが生じるかについても探索的に検討を試みる。

方法

参加者　東北地方にある A 大学の倫理委員会から実験実施の許可を受けた上で，同大学の社会心理学各論の受講生に実験参加を呼びかけ，74 名の学生が自発的に参加した。参加者の内訳は，男性 38 名，女性 36 名であった。参加者には，まず自分の性別，年齢，現在の異性関係について回答を求めた。現在の異性関係については,「結婚している」,「結婚はしていないが，恋人はいる」,「結婚はしていないし，恋人もいない」という選択肢から当てはまるものを選択させたところ，結婚しているものはいなかった。結婚はしていないが恋人がいる非シングルの参加者は 34 名, シングルの参加者は 39 名だった。無記名が 1 名いた。

手続き　研究 1 では，以下に述べる尺度を用いて参加者に自己評定を行わせ，その後，性別（男性か女性か），異性関係（シングルか非シングルか），年齢（約 25 歳か約 40 歳か）の次元において記述が異なる 8 人のターゲットのプロフィールをランダムに呈示し，自己評定と同じ尺度を用いてその評定を求めた。ターゲットの記述例は「あいという女性は，約 3 年間仙台市に住んでいます。彼女は 26 歳です。彼女には, 現在, 真剣に交際している相手がいます」(若年女性非シングル条件）といったもので，他のターゲットに関しても同様に記述したが，仙台市の居住歴は変化させた（2～5 年)。また，ターゲットの名前は，約 25 歳と約 40 歳という年齢の設定を考慮して，明治安田生命による 1969 年度と 1984 年度の名前ランキング上位 10 位の中から選択した。参加者の自己評定およびターゲット評定では, Greitemeyer（2009）が研究 1 と研究 2 で使用している項目を用いて，パーソナリティ特性，身体的魅力，生活満足感，異性関係の満足感，孤独感を測定した。Greitemeyer はパーソナリティ特性としてビック・ファイブすべて（外向性，協調性，勤勉性，情緒不安定，開放性）を測定していたが，本研究では開放性を取り上げなかった。その理由は，開放性が高いことを肯定的に評価する人もいれば，それを否定的に評価する参加者がいるなど，この次元は評価が一義的ではないからである。また，自尊心の測定も本研究では行わなかった。日本人は欧米人と比較して一般に自尊心を低く報告する傾向がある (Yamaguchi, Greenwald, Banaji, Murakami, Chen, Shiomura, Kobayashi, Cai & Krendl, 2007)。また，自分を低めることで相手に対する敬意を表する謙譲語を使用するなど，日本文化においては自尊心が高いことが決して好意的に評価されるわけではない。以上の従属変数はすべて 1 項目で測定したが，日本人の参加者に質問内容が理解しやすいように，質問項目はターゲットの名前を入れた文章の形で呈示した（表 1 参照)。参加者には, それぞれの特徴がターゲットにどの程度当てはまるのか，8 件法（1：まったく当てはまらない～8：とても当てはまる）で評定させた。自己評定においてもターゲット評定で用いた文章と同じ質問項目を使用したが，ターゲットの名前の部分は「私」に変更し，それぞれの特徴がどの程度自分に当てはまるか，同じく 8 件法で評定させた。

表1. 本研究で用いた評定項目

外向性	○○は，社交的で，誰とでも気軽に付き合える
協調性	○○は，親切で，人に優しい方だ
勤勉性	○○は，何事にも堅実で，きちんとしている
情緒不安定	○○は，心配性で，気分が落ち込みやすい
身体的魅力	○○は，異性から見て容姿が魅力的な方である
生活満足感	○○は，現在の生活に満足している
異性満足感	○○は，現在の異性関係に満足している
孤独感	○○は，毎日の生活の中で孤独を感じることが多い

結果

ターゲットの評定　研究1の焦点はシングルが否定的に評価されるかどうか，そして，シングルに対する否定的評価が外集団差別によるものかどうかを明らかにすることである。そこで，8 人のターゲットをシングルか非シングルかによって2グループに分けた後に外向性，協調性，勤勉性，情緒不安定性，生活満足感，身体的魅力，異性関係の満足感，孤独感のそれぞれの平均評定値を計算した。その 8 つの平均評定値を従属変数として 2（参加者の異性関係）×2（ターゲットの異性関係）の2要因混合計画の分散分析を行った。

すべての従属変数においてターゲットの異性関係の主効果が有意であった：外向性（$F(1, 71) = 72.26, p < .001$），協調性（$F(1, 71) = 52.96, p < .001$），勤勉性（$F(1, 71) = 36.32, p < .001$），情緒不安定（$F(1, 71) = 46.10, p < .001$），身体的魅力（$F(1, 71) = 72.60, p < .001$），生活満足感（$F(1, 71) = 152.35, p < .001$），異性関係の満足感（$F(1, 71) = 240.77, p < .001$），孤独感（$F(1, 71) = 138.75, p < .001$）。表2の左半分に研究1の項目別平均値を示すが，これに示されているように，シングル・ターゲットは非シングル・ターゲットよりも外向性，協調性，勤勉性，身体的魅力，生活満足感，異性関係の満足感に関してはすべて低く評定され，情緒不安定性，孤独感，異性関係の変化願望に関しては高いと評定された。参加者の異性関係の主効果，および，ターゲットの異性関係と参加者の異性関係の交互作用効果はいずれの従属変数でも有意ではなかった。

表2. ターゲット評価における各従属変数の平均値（ターゲットの異性関係別）

	研究1		研究2	
	シングル	非シングル	シングル	非シングル
外向性	4.10	5.30	4.17	5.25
協調性	4.62	5.56	4.46	5.48
勤勉性	4.77	5.53	4.69	5.46
情緒不安定	4.83	3.90	4.43	3.78
身体的魅力	4.02	5.09	3.97	5.02
生活満足感	3.98	5.75		
異性関係満足感	3.21	5.88		
孤独感	5.26	3.25		

参加者の自己評定　参加者の異性関係が自己評定に影響するかどうかを検討するために，外向性，協調性，勤勉性，情緒不安定，身体的魅力，生活満足感，異性関係の満足感，異性関係の変化願望，孤独感を従属変数，2（参加者の異性関係）×2（参加者の性別）を独立変数とした多変量分散分析を行った。その結果，異性関係の満足感に対して，参加者の異性関係の主効果が確認された（$F(1,67) = 23.586, p < .001$）。シングル参加者（$M = 3.91$）は非シングルの参加者（$M = 6.12$）と比較して自分自身の異性関係に対する満足感が低かった。また，異性関係の変化願望に関しても，参加者の異性関係の主効果が認められ($F(1, 67) = 16.387, p < .001$), シングル参加者（$M = 5.08$）は非シングルの参加者（$M = 3.09$）よりも，異性関係を変化させたいという願望が強かった。ただし，この主効果は参加者の性別×参加者の異性関係との交互作用によって限定された($F(1, 67) = 6.455, p < .05$)。単純主効果検定の結果，シングルの男性参加者（$M = 5.85$）は非シングルの男性参加者（$M = 2.77$）よりも異性関係の変化を強く望んでいた($p < .001$)。一方，シングルの女性参加者と非シングルの女性参加者の間には変化願望に有意な差は確認されなかった。また，参加者がシングルの場合，シングルの女性参加者（$M = 4.32$）よりもシングルの男性参加者（$M = 5.85$）は異性関係の変化を強く望んでいた（$p < .05$）。

考察

研究 1 の目的は，シングルに対する否定的評価が日本人を対象にした場合でも見られるのかどうか検証することであった。その結果，すべての従属変数においてターゲットの異性関係の主効果が有意となった。シングルは非シングルよりも内向的で，協調性が低く, 勤勉性に欠け, 情緒不安定で，身体的魅力に乏しく，現在の生活や異性関係に対して不満を抱き，孤独だと評定された。それゆえ，仮説 1 から仮説 3 は支持されたと言える。

さらに研究 1 では，参加者の異性関係が彼らの自己評価に与える影響についても検討した。その結果，シングルの参加者は非シングルの参加者と比較して，自分の異性関係に対して不満を感じていることが明らかとなった。しかしながら，それ以外の従

属変数では，シングル参加者と非シングル参加者の自己評定の間に有意な差は見られなかった。この結果から，パーソナリティ側面や身体的魅力など多くの側面で見られたシングルへの否定的評価は事実ではなく誤った認知に基づくステレオタイプであると解釈することができる。

注目すべき結果として，参加者の異性関係がシングルと記述されたターゲットの評価に影響を与えなかったことが挙げられる。つまり，非シングルの参加者と同じように，シングル参加者もシングル・ターゲットを否定的に評価していたということである。欧米での研究においても，シングリズムが評定者の個人属性の影響を受けにくいことを示している。たとえば，Morris, Sinclair and DePaulo（2007）は，シングルに対する否定的評価が評定者の異性関係とは無関係に生じることを見出している。また，シングリズムは評定者の性別や年齢とも無関係に生じることもまた知られている（Conley & Collins, 2002）。これらの知見は，シングリズムが評価者の個人属性を超越して共有される規範や社会的信念によって生み出されている可能性を示唆している。しかし，そのようなシングリズムを生み出す心理過程についてはほとんど研究が行われていない。そこで研究 2 では，「多くの人が恋愛や結婚を皆が望んでいる」と考える信念の存在を仮定し，これがシングリズムの生成に関与しているのかどうか検証する。

研究 2

「多くの人々が結婚や恋愛を望んでいる」と考える信念が共有されているならば，人々はシングルを配偶者や恋人を得られなかった失敗者とみなしやすくなるであろう。そして，シングルを失敗者とみなすそうした認知は彼らのパーソナリティや身体的魅力に対する評価をさらに引き下げると予測される。そこで，研究 2 では，結婚願望信念に注目し，結婚願望信念を強く抱く参加者はそれの弱い参加者と比較して独身者をより否定的に評価する（仮説 4）という仮説を立て，その検討を試みた。

ただし，結婚願望信念を共有する全ての人がシングリズムに対して否定的な評価を形成するとは限らない。本研究では，結婚願望信念とシングリズムの関係を調整する要因として，結婚を制御可能とみなすかどうかの認知を取り上げる。制御可能性の認知は一般に偏見や差別の程度を調整する効果を持つことが知られている（Crandall & Martinez, 1996；Whitley, 1990）。例えば，肥満差別の研究では知覚者が肥満という被差別要因を制御可能なものだと認知する場合，肥満者に対してより否定的な反応を示すことが見出されている（Crandall & Martinez, 1996）。肥満と同様にシングルも生得的ではない操作可能なステータスであるため，シングリズムに関しても制御可能性認知の調整効果が期待される。具体的には，結婚を制御可能なものだと認知する参加者は，結婚願望信念を強く支持するほどシングルに対してより否定的な評価を下すと予想される。これに対して，結婚を制御不可能と認知している場合には，シングルへの評価から運などの外的な要因の影響を割り引くので，結婚願望信念の強さにかかわらずシングリズムは弱まると予測される（仮説 5）。

方法

参加者　東北地方にある A 大学の倫理委員会から実験実施の許可を受けた。同大学の社会心理学各論の受講生，および，大

学敷地内にて学生たちに実験参加を呼びかけ，214 名の学生が自発的に参加した。参加者の内訳は，男性 109 名，女性 105 名であった。このうち，非シングルの参加者は 102 名, シングルの参加者は 111 名であり，無記名が 1 名いた。

手続き　参加者には，研究 1 で使用したものと同様のターゲットを示して評定を求めた。ただし，ターゲットの名前については研究 1 と異なるものを使用し，年齢と仙台市の居住歴（2〜5 年）についてもランダムに組み合わせを変更した。

ターゲット評定の外向性，協調性，勤勉性，情緒不安定性，身体的魅力は研究 1 と同じであった。また，結婚願望信念を測定するために，7 項目を新たに作成した。それは,「ほとんどの人は結婚したいと考えている。」,「もしも結婚するチャンスがあるのなら，誰でも結婚しようとするだろう。」,「ほとんどの人が結婚にあこがれている。」,「結婚したいと思う心は，すべての人間に共通している。」,「結婚は，ほとんどの人が望む人生の目標である。」,「ほとんどの場合，独身の人も本当は結婚したいと考えている。」「相手がいれば，ほとんどの人は結婚を望むものである。」の 7 項目である。参加者にはそれぞれを 5 件法で評定させた（1：まったくそう思わない〜5：まったくその通りだと思う）。信頼性は十分に高いものだった（α=.875）。さらに，結婚の制御可能性認知尺度も新たに作成した。項目は,「人が結婚できるか結婚できないかは，本人の頑張り次第である。」,「本人が頑張ったとしても，チャンスに恵まれなければ結婚できないであろう。」,「結婚は，本人の努力によるものが大きい。」,「結婚には，運のような偶然の要素が重要である。」,「結婚できないのは，その人の頑張りが足りないからである。」,「人が結婚できるかどうかは，偶然によって決まるところが大きい。」,「努力さえすれば，人は誰でも結婚することができる。」,「結婚は，本人の力ではどうすることもできないものである。」の 8 個である。これについても 5 件法で評定させ，信頼性も許容水準だった（α=.725）。最後に，参加者には自分の性別，年齢，異性関係（研究 1 と同様に選択式）を回答させた。

結果

ターゲットの外向性，協調性，勤勉性，情緒不安定，身体的魅力を従属変数に，2（結婚願望信念の強さ：高群か低群か）×2（制御可能性認知：可能群か不可能群か）×2（ターゲットの異性関係）の 3 要因混合計画分散分析を行った。このとき，前者のふたつの要因が参加者間計画，最後の一つの要因が参加者内要因であった。このとき，結婚願望信念は中央値（Me = 3.143）を除き，参加者を信念低群（N = 95）と信念高群（N = 81）の 2 群に分けた。同様に，結婚の制御可能性認知に関しても，中央値（Me = 2.625）を除いた上で参加者を制御不可能群（N = 82）と制御可能群（N = 94）の 2 群に分けた。

すべての従属変数において異性関係の主効果が有意であった：外向性（F (1, 172) = 161.60, p < .001），協調性（F (1, 172) =202.49, p < .001），勤勉性（F (1, 172) = 97.30, p < .001），情緒不安定（F (1, 172) = 52.78, p < .001），身体的魅力（F (1, 172) = 164.94, p < .001）。表 2 の右半分に研究 2 の項目別平均値を示すが, これに示されているように, シングル・ターゲットは非シングル・ターゲットよりも外向性，協調性，勤勉性，身体的魅力に関してはすべて低く評定され，情緒不安定性に関しては高いと評定された。

外向性に関して，ターゲットの異性関係×結婚願望信念の交互作用が有意であった (F (1,172) = 11.67, p < .01)。信念高群の参加

者（$M = 3.96$）は，信念低群の参加者（$M = 4.38$）よりもシングルの外向性を低く評定した（$p < .01$）。これに対して，非シングル・ターゲットに対する評定には結婚願望信念の影響は見られなかった。

協調性，勤勉性，身体的魅力の各従属変数おいてもターゲットの異性関係×結婚願望信念の交互作用が有意となった（協調性 $F(1,172) = 7.42, p < .05$; 勤勉性 $F(1,172) = 4.60, p < .05$; 身体的魅力 $F(1,172) = 6.61, p < .05$)。表 3 が示す通り，結婚願望信念が低い人も非シングルよりもシングルの協調性，誠実性，身体的魅力を低く評定していたが，結婚願望信念が強い参加者においてはそうしたシングルと非シングルの評定差がより大きかった。

表3.　ターゲット評定の平均値（ターゲットの異性関係×参加者の結婚願望信念）

	外向性		協調性		勤勉性		身体的魅力	
結婚願望信念	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群
既婚	5.18	5.35	5.36	5.61	5.34	5.63	4.94	5.15
独身	4.36	3.94	4.50	4.35	4.70	4.63	4.07	3.85

考察

研究 2 の結果は研究 1 の結果を再現し，日本におけるシングリズムの頑健性を示したものでもあった。本研究では全ての従属変数に関してターゲットの異性関係の主効果が確認され，シングルは非シングルよりも内向的で，協調性や勤勉性に欠け，情緒不安定で，身体的魅力に劣ると評価されていた。

研究 2 では，シングリズムを生み出す要因として結婚願望信念と制御可能性認知を挙げ，それらがターゲット評定に与える影響についても検証した。分析の結果，外向性に関しては，結婚願望信念がシングルに対する評定に影響を与え，高信念群は低信念群と比較してシングルをより内向的であると評定した。また，協調性，誠実性，身体的魅力については，高信念群が低信念群よりもシングルと非シングルに対する評定の差を広げていたため，間接的にではあるが高信念群においてシングリズムが強いことが示された。情緒不安定性以外の従属変数においては結婚願望信念による調整効果が認められたことから，仮説 4 についてもおおむね支持されたと言える。これに対して，制御可能性の認知はシングルの評価と関連が見られなかったため仮説 5 は支持されなかった。ただし，本研究の参加者は結婚を一般的に制御不可能なものとして捉える傾向にあったため（$Me = 2.625$），こうした回答の偏りが結果に影響した可能性は否定できない。この問題は，測定上の問題点を改善した上で，更に検討する必要があるだろう。

結論

本研究は，欧米で行われた研究の結果を再現し，日本人がシングルに対してステレオタイプに基づく否定的評価を抱いていることを明らかにした。また，本研究ではシングリズムを生み出す心理的要因についても検討を行った。評価者の個人属性がシングル・ターゲットへの評価とほとんど関連しないという先行研究との一貫した知見か

ら，本研究では社会的に共有された知識や信念がシングリズムの基盤になっていると仮定した。そこで，本研究では，「成人は皆，結婚したがっている」と推測する結婚願望信念に注目し，シングル・ターゲットへの評価に対する結婚願望信念の調整効果を検討した。その結果，結婚願望信念を強く抱く人は，それの弱い人よりも，シングルに対する評価をより否定的に，もしくは非シングルに対する評価をより肯定的に評価する傾向にあった。これまでの研究では，こうした信念の影響を念頭に置いていたものの，実際の検討はされてこなかった。それゆえ，シングリズムと社会的に共有された結婚願望に関する信念との関連を明らかにした点においても，本研究は非常に有意義なものだと言える。

研究 1 と 2 は一貫して，人々がシングリズムを保持していることを示したが，これをシングルへの否定的評価というよりも，非シングルに対する肯定的評価として解釈することも可能かもしれない。実際，恋愛ポジティブ幻想という概念を用いて，パートナーを持つ人がより肯定的な印象を抱かれることを実証した研究も報告されている（勝谷・若尾・天野, 2004）。しかし，本研究の結果はシングリズムとポジティブ幻想が近接する概念であっても，表裏一体ではないことを示唆している。研究 2 において，結婚願望信念の強い参加者はそれの弱い参加者よりも有意なものではなかったが，非シングル・ターゲットの身体的魅力や勤勉性を肯定的に評価している。これに対して，外向性の次元では高信念群の参加者は低信念群と比較してシングル・ターゲットにより否定的な評価を下した。これらの結果は，パートナーがいることでより肯定的に評価される特性と，シングルであることでより否定的に評価される特性があることを示しており，後者は恋愛ポジティブ幻想では解釈できない，シングルに対する否定的評価（シングリズム）だと考えられる。今後は，シングルであること自体が否定的評価を生じさせる特別な理由について明らかにしていく必要があるだろう。

最後に，本稿のふたつの研究はシングルに対する否定的なステレオタイプを検証したものであり，差別行動を検討したものではない。シングルに対する否定的評価も当然問題だが，それが差別として行動に影響を与えるとなれば，問題はさらに深刻である。海外では住宅の賃貸場面でシングルが差別を受けることを明らかにしているが（Morris et al., 2007），日本でも同じようにシングリズムが差別行動として生じているのだろうか。将来の研究では，この点を検討していく必要がある。

引用文献

朝井・水落. (2010). 第 8 章　結婚タイミングを決める要因は何か. 佐藤・永井・三輪(編), 結婚の壁-非婚・晩婚の構造. 勁草書房.

Byrne, A., & Carr, D. (2005). Caught in the cultural lag: The stigma of Singlehood.　Psychological Inquiry, 16, 84–141.

Conley, T. D., & Collins, B. E. (2002). Gender, relationship status, and stereotyping about sexual risk. Personality and Social Psychology Bulletin, 28, 1483-1494.

Crandall, C. S., & Martinez, R. (1996). Culture, ideology, and antifat attitudes. Personality and Social

Psychology Bulletin, 22, 1165–1176.
DePaulo, B. M., & Morris, W. L., (2006). The unrecognized stereotyping and discrimination against singles. Current Directions in Psychological Science, 15, 251-254.
Dion, K., Berscheid, E., & Walster, E. (1972). What is beautiful is good. Journal of Personality and Social Psychology, 24, 285-290.
Greitemeyer, T. (2009). Stereotypes of singles: Are singles what we think? European Journal of Social Psychology, 39, 368–383.
勝谷紀子・若尾良徳・天野陽一. (2004). 恋人がいる人の割合推測・“恋人がいる人”と“恋人がいない人”イメージの変化-日本の若者にみられる恋愛普及幻想と恋愛ポジティブ幻想 (5)-. 日本社会心理学会第45回大会発表論文集.
Morris, W.L., Sinclair, S., & DePaulo, B. M. (2007). No shelter for Singles: The perceived legitimacy of marital status discrimination. Group Processes Intergroup Relations, 10, 457-470.
Morris, W. L., DePaulo, B. M., Hertel, J., and Taylor, L. C. (2008). Singlism-Another problem that has no name: Prejudice, stereotypes, and discrimination against singles. In T. G. Morrison & M. A. Morrison (Eds), The psychology of modern prejudice. Hauppauge, NY: Nova Science Publishers.
NHK 放送文化研究所. (2009). 「第 8 回日本人の意識・2008」調査.
総務省統計局 (2016). 平成 27 年国勢調査.
筒井淳也. (2010). 第 6 章　結婚についての意識のズレと誤解. 佐藤・永井・三輪(編), 結婚の壁-非婚・晩婚の構造. 勁草書房.
若尾良徳・勝谷紀子・天野陽一 (2003). みんな恋人がいる-日本の若者に見られる恋愛普及幻想と恋愛ポジティブ幻想. 日本心理学会第 44 大会発表論文集
Whitley, B. E. (1990). The relationship of heterosexuals' attributionsfor the causes of homosexuality to attitudes towards lesbians and gay men. Personality and Social Psychology Bulletin, 16, 369–377.
山田昌弘・白河桃子. (2008). 「婚活」時代. ディスカヴァー・トゥエンティワン.
Yamaguchi, S., Greenwald, A. G., Banaji, M. R., Murakami, F., Chen, D., Shiomura, K., Kobayashi, C., Cai, H., & Krendl, A. (2007). Apparent universality of positive implicit self-esteem. Psychological Science, 18, 498–500.

執筆者紹介（所属）
山本　雄大　八戸学院大学　人間健康学科　講師
山本　潤美